

少人数教育の充実に向けた取組

【会津教育事務所】

学 校 名	猪苗代町立東中学校
学年・教科等	第1学年・数学科・理科・英語科

学習意欲を高め、つまずきを軽減する授業実践の取組

1 数学科と理科における実践に際して

小学校から中学校へ進学する際、つまずきやすいと考えられる理数教科において、少人数で授業を行うことで、一人一人に目が届き、きめ細かい指導を行うことができると考えた。

特に、中学校入学時で既に能力差が見られる数学科においては、個に対する手立てにそった指導をすることで、理解の遅い生徒の底上げができると考えた。また、理科においては実験の基礎操作や探究の過程を身に付ける大切な時期なので、教師が余裕をもって生徒を支援できると考えた。

2 数学科と理科における実際の方法

1年生29名を出席番号で前半15名と後半14名に分けた。考えの練り上げが可能な活発な授業展開と生徒が互いに教え合うことにより高められる人間関係づくりを目指して実践した。

機械的に2つに分けると、得意な生徒と苦手な生徒が均等に分かれるわけではない。しかし、少人数なので発表しやすい雰囲気がつくりやすく、発表が苦手な生徒であっても発表できる場面が広がった。

数学は教師が1名で2グループの授業を担当するが、理科は2人の教師で2グループをそれぞれ分けて担当した。また、数学と理科が週時数が異なるので、数学は合同クラスで週1回行うようになる。

3 成果と課題

<数学科>

- 14、5名のグループにしたことで、生徒の学習状況が把握しやすくなり、個に応じた指導がよりしやすくなった。指導方法の工夫・改善をしたことにより、多面的・客観的に評価をすることができた。
- 予想以上に多様な課題の解決方法が考え出され、下位生徒にとっても、学習課題へ興味・関心を示し、意欲的な姿が見られた。
- 「めあて」「考える」「練り上げる」「まとめ」を提示しながら、指導過程「課題把握・解決・練習・強化」(学習サイクル)の工夫を行うことで、思考過程を大切にすることができ、課題解決の方法をより深く理解することができた。
- 学び合い活動により、考えを練り上げてお互いに教え合い(表現)をする態度が見られ、生徒一人一人のよさを認め合うことができ、高め合う態度が身に付いた。
- 家庭学習の習慣化や授業に関連した内容(動機付け)を考えた既習事項の確認(課題プリント、豆テスト)ができれば、より一層効果を示すと考えられる。
- 上位生徒には、考え方や着眼点、根拠を明らかにした説明ができるようにすることが大切である。下位生徒には、作図の場合などでは、順序を考えさせるなど学力に合わせた指導が必要である。
- 学び合い活動(ジグゾー班活動)は、単なる意見交換にならないように、課題解決方法を練り上げる時間を十分確保し、場面、目的、方法を考え、計画的に行うことが大切である。



<理科>

- 個々の生徒が活発に実験に取り組む姿が見られ、基礎操作を身に付けることができた。
- 1人の生徒が担う役割が大きくなるので、授業に生き生きと取り組む姿が見られた。
- 2人の教師で授業を進めていくため、授業内容について打ち合わせを行うことができたので、見通しをもった授業計画を立てることができた。
- 教師間で教材について互いに考えを出し合うことで、生徒に寄り添った内容にすることができた。
- 1グループが4つの班で実験を行うことができたので、実験の準備がしやすく、臨機応変に対応することができた。また、班や生徒に教師が容易に関わることができた。
- 互いの授業の様子を話し合うことで、定着が弱い部分や補充学習を行いたいところの確認ができ、生徒への手立てを具体的に立てることができた。



- 授業内容の確認のため、打ち合わせをこまめに行う時間調整が大変であった。
- 授業の内容によっては、クラス全員で情報を共有したい時があったが、数学との関係でできにくかった。

4 英語科における特色ある取組

本校の英語科では、1年生を2クラスに分けることなく、29人を一斉に指導している。少人数教育のカテゴリーから離れるが、特色ある取組について述べることにする。

(1) 英語教育推進リーダー中央研修

文部科学省は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(平成25年12月13日)を発表した。その中の施策である「英語教育推進リーダー中央研修」に本校教員が約2週間参加し、新しい手法や考えを学んだ。その手法は県内の英語教員に向けてカスケード研修として伝達している。自校における実践も行い、生徒の英語力の向上の一助として役立てた。

① All Englishでの授業

英語の授業をほぼ英語による指示で行っている。文法の導入や活動の説明も全て英語で行っている。例えば、1年生が「つまずく」と言われる3人称単数現在形を“3rd person singular”、複数形は“Plural”と教えた。チャレンジングな試みであったが、生徒はすんなり理解し、生徒の発話からもその英語が出てくるようになった。ポイントとしては、生徒が理解できる平易な英語でシンプルに話すことである。耳慣れた言葉におきかえることで理解へつながり、リスニング力や表現力の向上に寄与することができた。

② Authentic Materialの使用

アメリカの小学校で使われている宿題プリントをインターネットからダウンロードし、実際に「宿題」として使っている。小学校2、3年生向けからスタートしているが、適語補充やリーディングの問題も解くことができるようになった。指示ももちろん英語で書かれているため、自分が何をすることを求められているのかを読んで理解しなければならない。内容が目新しいこともあり、生徒は意欲的に取り組んでいる。リーディング力(内容理解と主旨把握、推察)の強化につながっている。

③ Personalization (自己関連性)

英語の授業を自己関連性を持たせて、理解を深めさせるようにしている。コミュニケーション的なアクティビティでは、自己の意見を言わせる場面を意図的に設けている。教科書のスピーキングに特化したページにおいても、会話文がより自然になるよう表現を加えるよう指示している。

(2) ICTの活用

本校では、AV機器が揃った視聴覚室を英語教室として使用している。デジタル教科書を用い、iPad等で動画や音楽、アプリケーションを使用しながら授業展開を行っている。

(3) CAN-DOリストの活用

昨年度まで、英語指導力向上事業でCAN-DOリストの作成、開発に取り組んできた。今年度の生徒の実態に合わせたCAN-DOリストを設定し、生徒の英語力と照合し、適宜授業改善に役立てている。来年度からは、会津地区ではNC、NHの併用となるため、より研究を重ねて進化させていきたい意向である。

(4) スペリングコンテスト全校縦割り学習会

猪苗代町の3中学校で取り組む「スペリングコンテスト」が毎年12月に実施されている。そのコンテストに向けて、合格率を高める目的で全校縦割り学習会に取り組んでいる。約20人ほどのグループに全校生が分かれ、上級生が下級生にスペリングや勉強方法を教えるものである。現職教育のテーマである「学び合い」「表現力の向上」ともタイアップさせ、全職員で取り組んでいる。

上級生がやさしく丁寧に下級生に教える姿や、学び合う姿が見られ、大変有意義な時間となっている。実際のスペリングコンテストでも、全校生の半数に近い生徒が満点を取得し、平均点を上げるなど、意義深く効果的な取り組みになっている。そこでも、CAN-DOリストを活用し、自己の肯定的な「できた」を実感させるツールとなっている。

The image shows two educational forms. The top one is a 'CAN-DO CHECK SHEET' with columns for 'CAN-DO' and 'CHECK SHEET' and rows for different activities. The bottom one is a 'What more can you do?' form with a large text area for reflection.

学びのすすめ スペコン Im Possible Time 2015		CAN-DO CHECK SHEET					
		1	2	3	4	5	
1	「New!」 新しい目標 【裏の空を見て の行動】	/	/	/	/	/	
2	「アウトプット」 1つ「英語」 【教え合い】	/	/	/	/	/	
3	「Make」 自分の 「家」 【家庭学習】	/	/	/	/	/	

What more can you do?
今日の自分はどんなに上りできるよになったかな?、
よく思い出して、自分自身を褒めよう。